

令和元年6月13日現在

機関番号：10102

研究種目：基盤研究(C) (一般)

研究期間：2015～2018

課題番号：15K04394

研究課題名(和文)現代の小学生の人物の描写傾向に関する研究

研究課題名(英文)A Study of Modern Tendency on The Drawing of The Person in School Children

研究代表者

花輪 大輔 (HANAWA, DAISUKE)

北海道教育大学・教育学部・准教授

研究者番号：70633155

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 3,100,000円

研究成果の概要(和文)：現代の小学生の人物描写の傾向に関する描画調査を実施した結果、認識的に人物の特徴を捉える描写傾向の減少が見られた。また、形式化や記号化の増加が見られる等、人物描写傾向の多様化を確認した。人物描写の自己評価では、学年の進行に伴い数値の下降傾向とともに、6年生では二極化が見られた。その反面、「表わそうとしたこと」等の記述件数が学年の進行に伴って増加しており、1年生を除く全ての学年でそれらの記述件数と自己評価の数値に正の相関(6年生： $r=0.514$)を確認した。以上のことから、人物を大人のように描くことができるかどうかではなく、子どもの表現意図や工夫を第一義的に捉えた指導の必要性を確認するに至った。

研究成果の学術的意義や社会的意義

現代の小学生を対象とした人物描写傾向の研究は僅少である。現代でも引用される子供の描画の段階は60年以上前のものも少なくなく、現代の子どもへの生活環境や視覚文化の影響は考慮されてはいない。また、描画の発達段階や傾向を無視するような指導方法に対するニーズも見られることから、現代の小学生の人物描写の傾向を明らかにし、表現意図と描画への自己評価の相関を確認できたことは、非常に意義深いと考えている。

研究成果の概要(英文)：As a result of having carried out the drawing survey by about the tendency of the portraiture modern primary schoolchild, it decreased that a child drew a person image for recognizing it. In addition, increase of "Formalization and the Coded" was seen and confirmed the diversification of the tendency to portraiture. The self-evaluation of the portraiture dropped according to the progress of the school year, and the 6grader was bipolarized. On the other hand, the descriptions such as what "I wanted to express" increased with the progress of the school year and had an equilateral association with numerical value of those descriptions and self-evaluation in all school years except the 1grader. (6grader: $R=0.514$) Based upon the foregoing, it is not important to "draw a person like an adult", it is necessary to make "an expression intention and the invention" of the child the first.

研究分野：教科教育学

キーワード：小学生の人物描写 描画の傾向 図画工作 絵の指導 表したい「こと」を絵に表す 自己評価と表現意図

様式 C - 19、F - 19 - 1、Z - 19、CK - 19 (共通)

1. 研究開始当初の背景

子どもの絵の発達の段階の研究はケロッグやアルンハイム、ローウェンフェルドらの研究が代表的である。彼らは質的な研究を重視しつつ、量的な研究を背景として、それぞれの子どもの発達の段階に応じた描画の特徴や傾向が体系化しており、現在の美術教育研究の前提として扱われている。しかし、それらの報告から60年以上が経過し、子どもたちを取り巻く状況も当時とは大きく異なる現代的なものとなった。子どもの描画については現代における幼児期後半以降の発達の遅延について有意差が認められたとの報告もある。

そこで、現代の小中学生の描画の発達の傾向を明らかにするために、村瀬(1984)¹⁾が子どもの空間意識の把握を目的として開発・実施した「絵画表現能力調査」を本学附属学校の児童生徒3400名に実施し、村瀬の研究結果と比較した。村瀬は学齢ごとの絵画表現の特徴や傾向を明らかにし、これまで感性的な領域として捉えられてきた子どもの絵の表現を量的な調査に基づいた科学的な見方を確立し、空間意識測定のための評定尺度を開発した。村瀬の研究結果との比較では、対象を俯瞰的に描く表し方の獲得が極端に早まった一方で、低学年においては「ものともとの重なり」や「人物描写」において白紙の解答が増加していること($p < 0.01$)が確認されると共に、「人物描写」においておおよそ9歳頃までとされる「様式化の段階」²⁾が高学年にまでずれ込んでいるケースを散見することができた。

①～③の描画の傾向は、1983年の子供の描画傾向と比べて明らかに特徴的であることから、研究の成果として大学美術教育学会誌等で報告した。しかしながら、おおよその現代的な子どもの描画傾向を報告することはできたものの、俯瞰的な描き方の獲得時期が早まったことは、子どもたちを取り巻くメディアの環境の著しい発達に起因するとの推察にとどまり、白紙の解答の増加に至っては「能力的に描けないのか、或いは態度形成が十分でないために描かないのか」の判別も難しく、それぞれの描画傾向が変化した要因の特定には至っていないことを今後の課題とした。

生活環境や視覚文化のめまぐるしい変化は、子どもの描画能力へ影響を及ぼすだけでなく、知的操作能力の低下を招きかねないため、それらの現代的な描画傾向の要因の究明に向けて、特に②に課題が見られた「人物描写」に焦点を絞り、より精緻に研究を進める必要があるとの結論に至った。しかし、村瀬の先行研究における当時の描画サンプルの入手が困難であることから、「人物描写等の発達にみる児童画の『形』と『意味』」(高田, 1989)³⁾を先行研究として取り上げ、30年前のこどもの人物描写描傾向との比較検討を通して、現代的な子どもの描画傾向を明らかにしたいと考えたことが、本研究の着想に至った経緯である。

子どもの実態を捉えた描画における指導内容や方法の改善とともに、白紙の解答の減少に結びつけることができたならば、この知的基盤社会において児童が自己を創造していくために、学校教育における図画工作・美術の位置づけ及び知性と感性のバランスのとれたカリキュラムの再考の契機となりうると考えている。

2. 研究の目的

高田(1989)の先行研究における人物描写調査の目的は、「児童の描画に多く表される『形』について、その発達の変容の実態を探ることを通して、意味づけられた部分の組み立てから成る発生的で象徴的な『形』の表し方から、児童期後期での再現的で形態模写的表し方への移行の過程を検討し、描画指導改善の視点を探る」こととされている。高田は、山口県の公立小学校の児童710名を対象とした調査を行い、その結果の分析から人物描写等の傾向を明らかにするとともに描画の特徴を抽出するとともに、描画パターンの分類化から評定の尺度を開発し、それらの構成比から人物描写の発達の變容を体系化した。本研究においては、高田が実施した描画調査のうち人物描写に焦点を絞り、小学校の児童を対象とした描画調査及びアンケート調査を実施し、高田の研究結果との比較・分析から、現代的な子どもの人物描写の傾向を明らかにすることを目的とする。

3. 研究の方法

(1)平成28年2月～3月にかけて、本学附属小学校において、「人物描写調査(予備調査)」を実施し、その結果を集計し、先行研究結果との分析・比較・検討を行う。特に北海道における現代の子どもの人物描写の発達の變容の傾向を明らかにすることを目的とする。人物描写調査は以下の4項目で実施する。

「調査 : 立っている人を描いて下さい。」

「調査 : ボールを拾っている人を描いて下さい」

「調査 : 体育の座り方で座っている人を描いて下さい」

「調査 : 走っている人を描いて下さい。」

調査方法は、4つの短文を読んで、5分から10分程度で所定の描画用紙に、短文の内容を鉛筆で線描するとし、教師による指導等は一切しないものとした。調査時期については先行研究と同様の時期(2月～3月)に実施する。

(2)平成28年9月に、本研究の先行研究とした高田利明氏への聞き取り調査を通して、1987年当時の児童の人物描写傾向との差異を検討する。

(3)平成28年12月に北日本S市の小学生を対象として、日常の視覚文化が描画に与える影響を検討する。以下の質問項目を7件法で問うものとした。

- 「質問1：あなたは絵を描くことが好きですか。」
 - 「質問2：あなたは絵を描くことが得意ですか。」
 - 「質問3：あなたは絵に描きたいものは思い付きますか。」
 - 「質問4：あなたは登場人物等の気持ちを考えることは得意ですか。」
 - 「質問5：あなたの人物の絵はマンガやアニメ・ゲームの影響を受けていますか。」
- (詳細は後述するが、先行研究当時の学習指導要領及び教科書等の比較から、子ども達に対する教科指導の概要を追加調査する。)

(4)平成31年2月～3月にかけて、研究協力校である北日本に位置するH市立O小学校、近畿地方に位置するK市立T小学校、中国地方に位置するI市立K小学校の児童593名を対象とした「人物描画調査(本調査)」,及び「描画に関するアンケート調査」を実施し、その結果を集計・分析・比較・検討を行う。人物描画調査は予備調査と同様の内容とするが、アンケート項目はこれまでの研究の経緯を踏まえ、「表わそうとしたこと」、「工夫したこと」の自由記述の他、思った通りに描くことができたか(作品への自己評価)を7件法で問うものとした。

4. 研究成果

(1) 予備調査(2016)より

2016年2月～3月に北海道の小学生の人物描写の傾向を明らかにすることを調査目的として、高田(1989)が開発した質問紙を用いて、本学附属小学校の児童1600名を対象とした「人物描画調査」を実施した。ここでは先行研究の傾向との差異が顕著なものを抜粋して報告する。

高田は「腕の表し方」を、腕がなく手のみ、腕を腕から離して表す、腕を腕に密着させて表す、の3つに分類した。高田の調査結果では、「腕を腕から離して表す」が、年齢を追う毎に「腕を腕に密着させて表す」への推移が見られ、6年生では2/3の児童が「腕を腕に密着させて表す」となっている。1987年の6年生は腕を腕から離して描いた児童は1/3程度まで減少傾向が見られたが、予備調査では2/3の児童が腕と腕を密着させて描かないことが明らかとなった。足部・脚部の表現においても同様の傾向が見られたことから、図式的或いはシンボリックな表現をする児童が高学年になっても一定の割合で存在することが明らかとなった。

さらに、「手を描かない」、あるいは「指を絵描かずに丸などの図式的な表現をする」、「顔の表情を省略する」等の子どもの表現の出現が見られた。これについては、花輪(2013)⁴⁾の調査で明らかとなった「省略、あるいは横着」の傾向と同様の傾向であると理解することができる。しかし、先行研究の方法及び評定尺度に従って調査を実施したが、評定尺度では測ることができない表現が多数出現しており、評定尺度を見直す必要性を確認するに至った。

(2) 高田利明氏への聞き取り調査(2016)より

本研究の先行研究の著者である高田氏の自宅を伺い聞き取り調査を実施した。その際、予備研究結果のデータ及び描画調査の各類型の代表作品を持参した。それら資料と、高田氏の手元にあった先行研究の資料を基に予備研究との相違点等をまとめ、以下の7点にわたる示唆を得た。

描写傾向のパターンは増加していること。

斜めからの描き方が増えている印象があること。

図式(様式化)の時期が後ろにずれ込んでいるのは事実であること。

多くの子どもが状況(文脈・シチュエーション)を考えながら描いていること。

消極的記号化(棒人間を含む)と積極的記号化が出現したこと。(先行研究ではなかった)

女子特有の様式化として「内股化(カワイイ文化)」が出現したこと。

予備調査は国立大学附属学校の児童を対象としているが、その環境の特殊性から、一般化のために公立学校を調査対象とする必要があること。

⑧子どもが形の操作をしながら新しい発見するための経験・環境・言葉が与えられたかどうか重要ということ。

(3) 日常の視覚文化が児童の描画に与える影響の調査(2016)より

予備研究結果と高田氏からの示唆を受け、平成28年12月に北日本S市立H小学校の児童154名を対象として、追加調査を実施した。記号化についての手がかりを掴もうとするものである。

その結果、中学年では性差を問わず影響を受けているという児童が半数程度いるものの、学年の進行に従って人物画へのマンガやアニメの影響を受けているといった自覚の関与がなくなると推察できる。カイ2乗検定の結果、男子:($p=0.074$),女子:($p=0.068$),全体:($p=0.011$)と有意差を確認した。予備調査ではドラえもんの手のような表現が頻出していることから、マンガやアニメ、ゲーム等の影響は一切ないとは言いがたいが、影響を受けていないと思っている児童が2/3程度まで増加することがわかった。また、少数ではあるが、高学年において影響を受けていると答えた児童は、絵を描くことが好きであり($r=0.514, p=0.002$),人物画を描くことも好き($r=0.496, p=0.002$)ということがわかった。

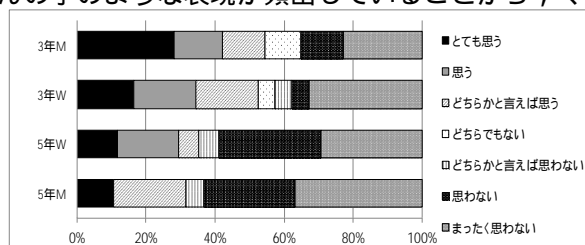


図1. あなたの人物の絵はマンガやアニメ・ゲームの影響を受けていますか。

表1. 昭和52年改訂の学習指導要領 第6節 図画工作より

1・2年	内容	感じたことや考えたことを絵や立体で表すことができるようにする。
3・4年		見たことや想像したことを絵で表すことができるようにする。
5・6年		観察や想像をもとにして、絵で表すことができるようにする。
1年	指導事項	ア クレヨン、パスなどの好きな色で思いのままに表すこと。
2年		ア クレヨン、パスなどにいろいろな色があることに気付き、表したいものの色や形に関心をもって表すこと。
3年		ア ものの前後の關係に気付くこと。 イ 水彩絵の具などの扱い方を理解し、表すものの感じをとらえ、形と色を考えて表すこと。
4年		ア 表すものの主となるものとその周りのものとの關係を考えること。 イ 水彩絵の具の扱いに慣れ、表すものの感じに合わせて、形と色を考え、混色、重色などの工夫をして表すこと。
5年		ア 主題がよく表れるように構想を練り、画面を構成すること。 イ 水彩絵の具などの性質を生かし、表すものの形、色などの特徴をとらえ、その感じかできるように工夫して表すこと。
6年		ア 主題がよく表れるように構想を練り、画面を効果的に構成すること。 イ 水彩絵の具などの性質を効果的に生かし、遠近、明暗などに気付けて、形、色などを工夫して表すこと。

内容については学年毎に示されていたが、2学年毎に同一の内容だったため、紙面の關係上まとめて標記した。
各学年共に判表現についての指導事項が掲載されていたが、紙面の關係上割愛した。

表2. 平成20年改訂の学習指導要領 第7節 図画工作より

1・2年	内容	感じたことや想像したことを絵や立体、工作に表す活動を通して、次の事項を指導する。
	指導事項	ア 感じたことや想像したことから、表したいことを見付けて表すこと。 イ 好きな色を選んだり、いろいろな形をつかって楽しんだりしながら表すこと。 ウ 身近な材料や扱いやすい用具を手を動かして使うとともに、表し方を考えて表すこと。
3・4年	内容	感じたこと、想像したこと、見たことを絵や立体、工作に表す活動を通して、次の事項を指導する。
	指導事項	ア 感じたこと、想像したこと、見たことから、表したいことを見付けて表すこと。 イ 表したいことや用途などを考えながら、形や色、材料などを生かし、計画を立てるなどして表すこと。 ウ 表したいことに合わせて、材料や用具の特徴を生かして使うとともに、表し方を考えて表すこと。
5・6年	内容	感じたこと、想像したこと、見たこと、伝えたいことを絵や立体、工作に表す活動を通して、次の事項を指導する。
	指導事項	ア 感じたこと、想像したこと、見たこと、伝えたいことから、表したいことを見付けて表すこと。 イ 形や色、材料の特徴や構成の美しさなどの感じ、用途などを考えながら、表し方を構想して表すこと。 ウ 表したいことに合わせて、材料や用具の特徴を生かして使うとともに、表現に適した方法などを組み合わせて表すこと。

それらを踏まえて、先行研究当時の学習指導要領や教科書を分析することとした。高田氏からの示唆の一つである「子ども達の経験・環境・言葉」に関して、子ども達一人一人の生活環境や幼児教育での経験を問うことは難しいが、小学校における図画工作の授業での経験や環境、言葉の根拠となり得ると考えた。

「絵」に関する内容、及び指導事項を「昭和52年改訂学習指導要領(先行研究当時1987年、昭和62年)」と「平成20年改訂年学習指導要領(本調査時2019年、平成31年)」より抽出し。表1、表2に示す。昭和52年改訂版は「絵で表す」とされ、指導事項には手段や方法について書かれている。一方、平成20年改訂版では「絵に表す」とされ、「表したいことを見付けて表すこと」が強調されている。いわゆる主題を表すための「手段や方法」であった「絵で表す」が、自己の感覚や感性を働かせながら、表したことを見付けて、工夫をしながら表す行為そのもの「目的」とする「教科観、或いは指導観の転換」が見られる。また、表1では「表したいもの」、「もの前後の關係」、「表すもの主となるもの」等「もの」の標記が多いのに対して、表2では「表したいこと」が強調されている。これらも「手段・方法」から「目的」と同様に、「もの」から「こと」へと「教科観、或いは指導観」の転換といえる。更に図画工作科の授業時数が、6年間トータルで418時間だったものが358時間と、60時間もの減少があった。

当然のことながら、学習指導要領に従って教科書検定が行われる訳であるから、前述のパラダイムシフトが反映されていると予想し、現在採択率が最も高いN社の昭和55年度版と平成26年版の教科書から、1年生から6年生までの「絵に(で)表す」題材を抽出し、その分類化、及び比較を試みた。その結果が(図2)である。S55年版では、いわゆる再現的な題材が半数以上を占めていたのに対して、H26年度版では14%程度に留まっている。(p=0.0001)

授業時数の減少に加えて教科書の内容から、見たものや生活経験を描く経験が圧倒的に減少したことがわかる。人物描写の経験も同様に減少していると考えられること、更には、人物を表す手段である「絵」の指導と、表したい人物とその文脈やシチュエーションを「絵」に表す指導(授業)では、作品の方向が大きく異なることが推察される。従って、高田氏の示唆にある「多くの子どもが状況(文脈・シチュエーション)を考えながら描いている」ことは、図画工作の授業が変わったことによるポジティブな成果と考えられると共に、「図式(様式化)の時期が後ろにずれ込んでいる」ことは決してネガティブな結果とはいえないと考えるに至った。

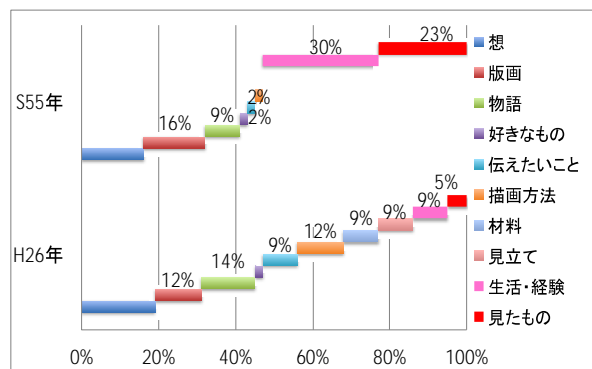


図2. S55年度版とH26年度版の教科書(絵に表す)比較

(4) 「人物描画調査(本調査)」,及び「描画に関するアンケート調査」から

表3. 調査 :「ボールを持っている人」を描いて下さい。6)

視点 パターン 学年	頭部・正面				頭部・側面								その他		判別不可			
	頭部・側面とも正面				頭部・側面は正面		頭部側面・頭部正面		頭部・側面とも側面		ボールを持っている		棒人間で描かれている					
	顔だけを伸ばす全体を傾げる	上半身を傾げ伸ばす	正面から2/3に描く	正面から1/3に描く	顔だけを伸ばす全体を傾げる	上半身を傾げる	顔の重なりを避け伸ばす	顔だけを伸ばす全体を傾げる	顔を伸ばし顔を曲げる	上半身を傾げ伸ばす	顔だけを伸ばす全体を傾げる	上半身を傾げ伸ばす						
1年生	1989	29.3%	3.0%	5.1%	1.0%	10.1%	6.1%	4.0%	3.0%	5.1%	6.1%	8.1%	5.1%	2.0%	1.0%	ns	ns	ns
	2019	52.1%	10.4%	0%	0%	0%	2.1%	0%	2.1%	0%	8.3%	0%	2.1%	0%	4.2%	2.1%	12.5%	
2年生	1989	10.3%	2.4%	2.4%	1.6%	18.3%	6.3%	7.1%	4.0%	5.6%	3.2%	8.7%	4.8%	4.0%	4.8%	ns	ns	ns
	2019	42.6%	2.5%	0.8%	0%	4.9%	1.6%	1.6%	1.6%	6.6%	1.6%	1.6%	0.8%	0%	11.5%	0%	9.8%	
3年生	1989	6.1%	0.9%	7.0%	1.7%	3.5%	0.9%	0.9%	2.6%	11.3%	3.5%	25.2%	2.6%	7.8%	18.3%	ns	ns	ns
	2019	29.2%	10.4%	0%	0%	2.1%	2.1%	6.3%	0%	2.1%	2.1%	2.1%	2.1%	4.2%	2.1%	12.5%	4.2%	6.3%
4年生	1989	1.7%	2.5%	1.7%	5.1%	0.8%	3.4%	3.4%	1.7%	5.9%	2.5%	24.6%	1.7%	10.2%	27.1%	ns	ns	ns
	2019	31.7%	4.9%	0%	4.1%	1.6%	3.3%	1.6%	0%	3.3%	1.6%	4.9%	1.6%	1.6%	4.1%	9.8%	3.2%	3.3%
5年生	1989	0%	1.0%	3.0%	5.0%	0%	0%	2.0%	0%	5.0%	2.0%	23.8%	1.0%	16.8%	34.7%	ns	ns	ns
	2019	18.0%	4.5%	0%	0.9%	4.5%	5.4%	6.3%	0%	1.8%	4.5%	1.8%	1.8%	0.9%	7.2%	14.4%	4.5%	3.6%
6年生	1989	0.9%	0%	0.9%	7.9%	0%	0%	0.9%	0.9%	2.6%	1.8%	19.3%	1.8%	9.9%	39.5%	ns	ns	ns
	2019	13.3%	11.7%	0%	6.7%	0%	3.3%	3.3%	0%	0%	5.0%	5.0%	0%	6.7%	15.0%	8.3%	0%	5.0%

平成31年2月～3月にかけて、研究協力校である北日本に位置するH市立O小学校、近畿地方に位置するK市立T小学校、中国地方に位置するI市立K小学校の児童593名を対象として描画調査及びアンケート調査を実施し、描画調査においては先行研究との比較分析を、アンケート調査においては描画調査とのクロス分析を試みた。人物描画調査は予備調査と同様の内容としたが、アンケート項目はこれまでの研究の経緯を踏まえ、「表わそうとしたこと」、「工夫したこと」の自由記述の他、思った通りに描くことができたか(作品への自己評価)を7件法で問うものとした。ここでは紙面とデータ量の関係で図としては調査(表3)を示す。

調査:「立っている人」で顕著だったことは、腕の表し方において、腕を道から離して表す児童が先行研究の1.5倍(6年生)腕を胸に密着させて表す児童が先行研究の約半数(6年生)、手の表し方において、極端な記号化が1年生で40%以上、2～4年生で1/3以上、高学年でも1/4以上出現したことである。また、脚部を三角の形状で表す記号化が新たに出現した。

調査:「ボールを持っている人」では、腕だけを伸ばしたり身体全体を傾げる表現が、先行研究では1年生29.3%だったものが4年生までに1.7%5年生では0%となっているのに対して、1年生で52.1%、2年生で42%、3年生で29.2%、4年生で31.7%、5年生で18.0%、6年生で13%と、学年の進行に従って減少しているものの、表現の段階の遅が感じられる。特に1-2年生においては有意差が見られた(カイ2乗検定:p=0.04)。また、ただボールを持っていると判断できる児童が一定の割合で出現していることに加え、判別ができない児童が低学年で1割程度出現している。予備調査の結果を踏まえて、評定の尺度を10パターン増加した。

調査:「体育の座り方で座っている人」では、先行研究の数値と比較すると減少傾向ではあるが、正面から捉えたように表す児童が多いことが確認された。しかし、中学年以降も顔・胸・腰部が正面に対して脚部が側面といった観面混合が15%前後見られるようになっている。これは先行研究では学年の進行と共に見られなくなった傾向である。予備調査の結果を踏まえて、評定の尺度を12パターン増加した。

調査:「走っている人」では、顔・胸・腰部が全て正面のまま、腕を曲げ足を開くか曲げる表現の傾向が多く見られた。特に5-6年生では有意差が確認された(カイ2乗検定:p=0.0001)。先行研究では、学年の進行に伴って、全てを側面で表す児童の増加が見られたが、今回の調査では、高学年でも観面混合が一定数出現することがわかった。

一方、表4、表5、表6はアンケート調査結果の概要である。

アンケート調査の項目は、これまでの研究の経緯を踏まえ、「表わそうとしたこと」、「工夫したこと」の自由記述の他、思った通りに描くことができたか(描画への自己評価)を7件法で問うものとした。

その結果、学年の進行に従って自己評価の数値が下降するものの、表したいことの記述件数の増加が見

表4. 描画の自己評価の平均と標準偏差

		1年生	2年生	3年生	4年生	5年生	6年生
調査	Ave.	6.00	5.71	4.83	4.93	4.61	4.28
	S.D	1.71	1.33	1.60	1.78	1.72	1.75
調査	Ave.	5.94	5.55	4.72	4.61	4.32	3.97
	S.D	1.80	1.46	1.63	1.84	1.75	1.89
調査	Ave.	5.72	5.28	4.74	4.37	4.14	3.85
	S.D	1.99	1.76	1.86	2.13	1.86	1.98
調査	Ave.	5.74	5.71	4.87	4.93	4.41	4.03
	S.D	1.88	1.578	1.77	1.96	1.72	1.86

表5.「表したいこと」の記述件数の割合

	1年生	2年生	3年生	4年生	5年生	6年生
調査	17.3%	34.1%	31.3%	39.0%	43.2%	48.5%
調査	23.1%	39.1%	39.6%	39.0%	55.9%	52.9%
調査	26.9%	35.5%	33.3%	34.2%	51.4%	47.1%
調査	23.1%	33.3%	39.6%	40.7%	56.8%	50.0%

表6. 描画の自己評価と「表したいこと」等記述件数の相関

	1年生	2年生	3年生	4年生	5年生	6年生
調査	0.859	0.821	0.807	0.808	0.899	0.749
調査	0.834	0.824	0.845	0.853	0.901	0.915
調査	0.881	0.854	0.818	0.836	0.286	0.883
調査	0.763	0.863	0.839	0.461	0.905	0.884
Ave.	0.299	0.471	0.466	0.581	0.441	0.514

られ、更には描画への自己評価と記述件数に強い正の相関があることが認められた。

アンケート調査は本研究独自のものであるため先行研究との比較はできないが、教科観や指導観の転換に対する学校現場での実践の成果であると考えている。

(5)研究成果まとめ

現代の小学生の人物描写の傾向を、パターンは一増加の一途であること、図式的或いはシンボリックな表現をする児童が高学年になっても一定の割合で出現すること、高学年で観面混合が一定の割合で出現すること、④先述の①～③は決してネガティブな状況とは限らないこと、文脈やシチュエーションを伴う「こと」を描く児童が増加していること、表したいことは学年進行に伴って増加すること、表したいことがあれば描画の自己評価が高まることの7点としたいと考えている。

推察の域を出ることはできないが、先行研究の1987年当時は、立っている人を描く指示を受け、立っている人を素直に描いた児童が多かったのかも知れない。しかし現代では、その指示を受けてなお、どんな人か、或いはどのような場面か等、描画の行為を通して想像を膨らませて、自らの「表したいこと」を考え、見付けて絵に表そうとする児童が増加したといえる。それはすなわち、平成の図画工作科教育の成果の一つとして捉えるとともに、本研究がそのエビデンスの一つになり得るのではないかと考えている。描画の発達段階や傾向を無視するような指導方法に対するニーズも散見されることから、現代の小学生の人物描写の傾向を明らかにし、表現意図と描画への自己評価の相関を確認できたことは、非常に意義深いと考えている。今後は、これまで以上に児童の絵に「表したいこと」が描かれるように、学会誌での論文発表に邁進したい。

1) 村瀬千樫「絵画表現における子どもの空間表現に関する研究」教育美術 1984年8月号, pp.12-27, 1984

2) 花輪大輔「現代における小中学生の絵画表現の発達段階の検討」大学美術教育学会誌 46号, pp.221-228, 2014

3) 高田利明「人物描画等の発達にみる児童画の『形』と『意味』」教育美術 1989年8月号, pp.16-36, 1989

4) 2)同上

5) 李知恩・渡邊千晴・花輪大輔「教育大学生と小学生の『絵に表す』題材についての認識のズレ」北海道教育大学紀要第68巻第1号, pp.243-251, 2017

6) 3) 同上

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕(計1件)

李知恩・渡邊千晴・花輪大輔「教育大学生と小学生の『絵に表す』題材についての認識のズレ」北海道教育大学紀要第68巻第1号, 査読なし, pp.243-251, 2017

〔学会発表〕(計6件)

花輪大輔「小学生の人物描写における現代的な傾向について : 高田(1989)の先行研究との比較から」第32回実践美術教育学会岡山大会, 2017年, 岡山県総社市

花輪大輔「想像と記憶による描画に関する一考察-小学校図画工作科における描画調査の結果から-」北海道美術教育学会, 2017年, 北海道札幌市

花輪大輔「小学生の人物描画の現代的傾向の研究 : 高田利明(1989)の先行研究を手がかりとして」第39回美術科教育学会静岡大会, 2017年, 静岡県東静岡市,

花輪大輔「小学生の人物描画におけるサブカルチャーの影響に関する一考察」北海道美術教育学会, 2017年, 北海道札幌市

花輪大輔・三橋理穂「既存の物語教材の読み聞かせと視覚情報が子どもの描画に及ぼす影響-『くまくまぱん』(西村敏雄, 2013)の教材化から見えるもの-」第40回美術科教育学会滋賀大会, 2018年滋賀県大津市

花輪大輔「想像と記憶による描画に関する一考察-小学校図画工作科における描画調査の結果から-」北海道美術教育学会, 2018年, 北海道札幌市

6. 研究組織

(1)研究代表者

花輪 大輔 (HANAQWA, Daisuke)

北海道教育大学 教育学部 准教授

研究者番号: 70633155